日本免疫学会 会長就任にあたって

この度、宮坂昌之会長の後任として第16代日本免疫学会会長に就任することになりました。任期は2008年10月1日から2010年9月30日までの2年間です。同時に、本年12月1日(月)から3日間、京都市左京区宝ヶ池の国立京都国際会館で開催されます第38回日本免疫学会・学術集会の会長としての責務を負っております。さらに、任期中の2010年8月22日(金)から5日間には岸本忠三先生を大会会長とする第14回国際免疫学会が関西(神戸)で開催されることになっており、既に現在の第15代会長である宮坂昌之先生を中心に、その準備が始まっております。1983年の京都における第5回以来実に27年ぶり2度目の国際免疫学の開催は、日本免疫学会が総力を挙げて取り組まなければならない大きな行事です。このような時期に、NPO法人日本免疫学会会長としての重責を負うことは、大変光栄に存じますが、一方で肩に掛かる重さを痛感し、身の引き締まる思いでおります。微力ながら、全力を尽くしたいと思っておりますので、何卒よろしくご支援・ご協力のほどお願い申し上げます。

1971年に発足した日本免疫学会も任意団体から2005年にはNPO法人として組織を変え、今や6000名を越える会員数を有し、アメリカ免疫学会に次いで世界第2位の会員数を誇る学会として成長しています。さらに会員による卓越した研究は、世界の免疫学の一翼を担うだけでなく、医学のみならず広く生命科学の発展を牽引する大きな力となっていると言っても過言ではないと思います。これらは、学会員それぞれの努力と研鑽の賜であることは言うに及びませんが、日本免疫学会の歴代の会長ならびに学会運営を進めてこられました諸先生方のご尽力によるものです。心より敬意を表しますと共に、この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。

このように目覚ましく発展してきた免疫学会ではありますが、ここ数年学会員数も漸減の兆しが見え始め、学術集会の演題数も一昨年から昨年、昨年から今年にかけて100演題以上が減少しております。また、学術集会参加者も一時は3,000名を越えておりましたが、最近は2,600～2,700名程度にまで減少してきております。科学技術の進歩に伴い、世の中にものがあふれる一方、研究環境に厳しさが増し、若手研究者が将来の活路を見定めにくい状況に立ち至っていることが一つの要因であることは否めません。また、多種多様な学会・研究会が設立され、それぞれの場での活動が重複してきていることも考えられます。しかし、14代会長の平野先生が書いておられましたように、日本免疫学会の理念は、「免疫学を志す会員を組織的に支え、もって免疫学の発展を促進すると共に、免疫学をより広く世界に広めること」です。この理念にしたがって、歴代の会長の下に種々の改革も行われてきており、中堅の研究者の先生方にも積極的に学会運営に関わっていただく場が広がっております。

これらを引き継ぎ、将来を担う若手研究者の育成と共に、学会員はもとより一般社会に対しても免疫(学)の重要性をアピールし、研究への理解を深めていただけるよう努めていく所存であります。つきましては、どうか皆様方からの、忌憚のないご意見、ご提案を頂けますよう、またさらなるご支援をよろしくお願い申し上げます。

なお、私の就任に伴い、総務委員会の正副委員長(庶務担当幹事)は中山俊憲先生(千葉大)と三宅建介先生(東大・医科研)に、財務委員会委員長(会計担当幹事)は烏山一先生(東京医科歯科大)に代わり瀧伸介先生(信州大)に、あり方委員会委員長は黒崎知博先生(理研・免疫アレルギー)にお願いいたしました。

京都大学大学院生命科学研究科・体制統御学講座生体応答学分野
稲葉 カヨ
Kayo Inaba